

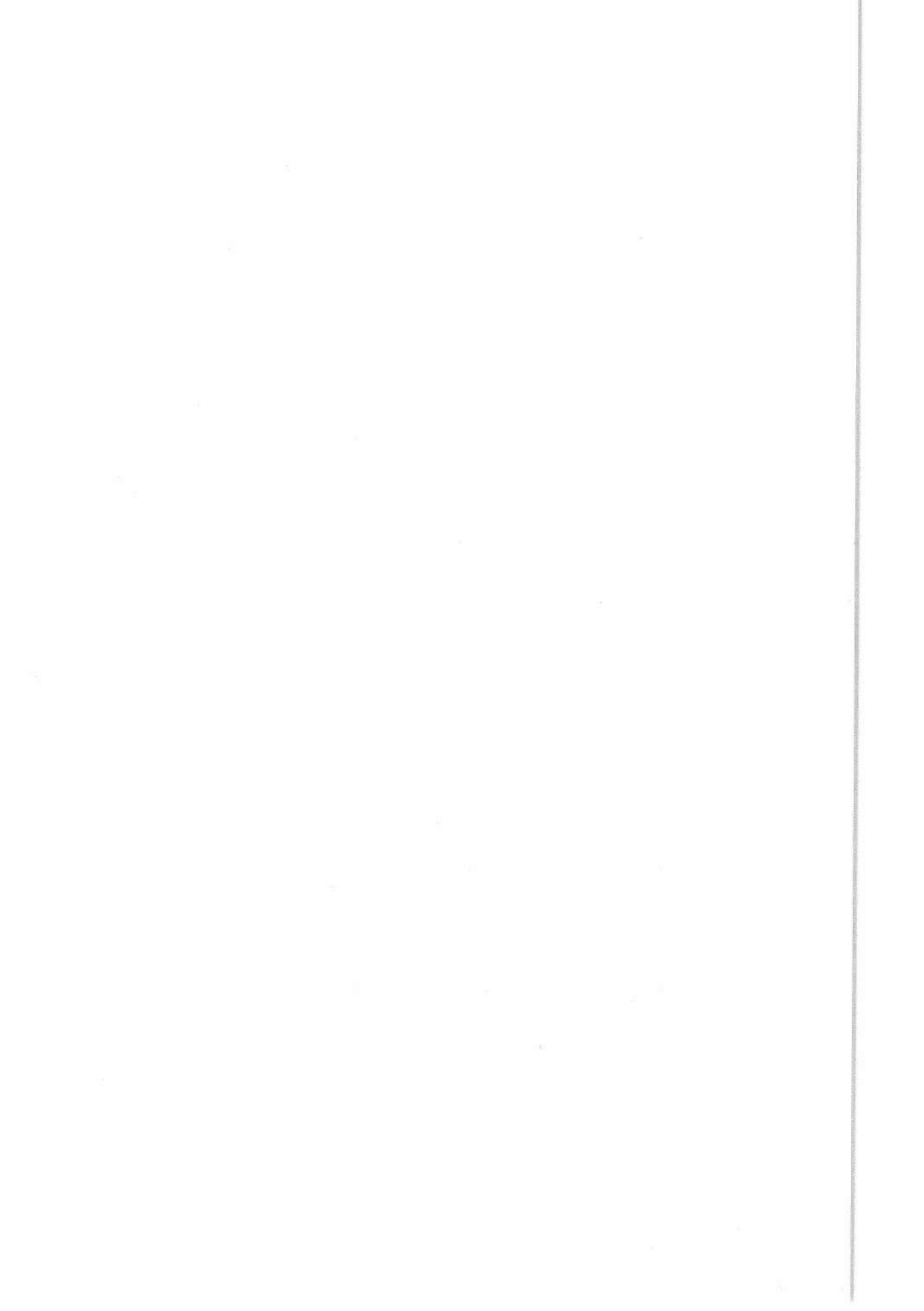
埋藏文化財緊急発掘調査

# 高 根 遺 跡

— 緊急発掘調査報告書 —

1973

南箕輪村教育委員会

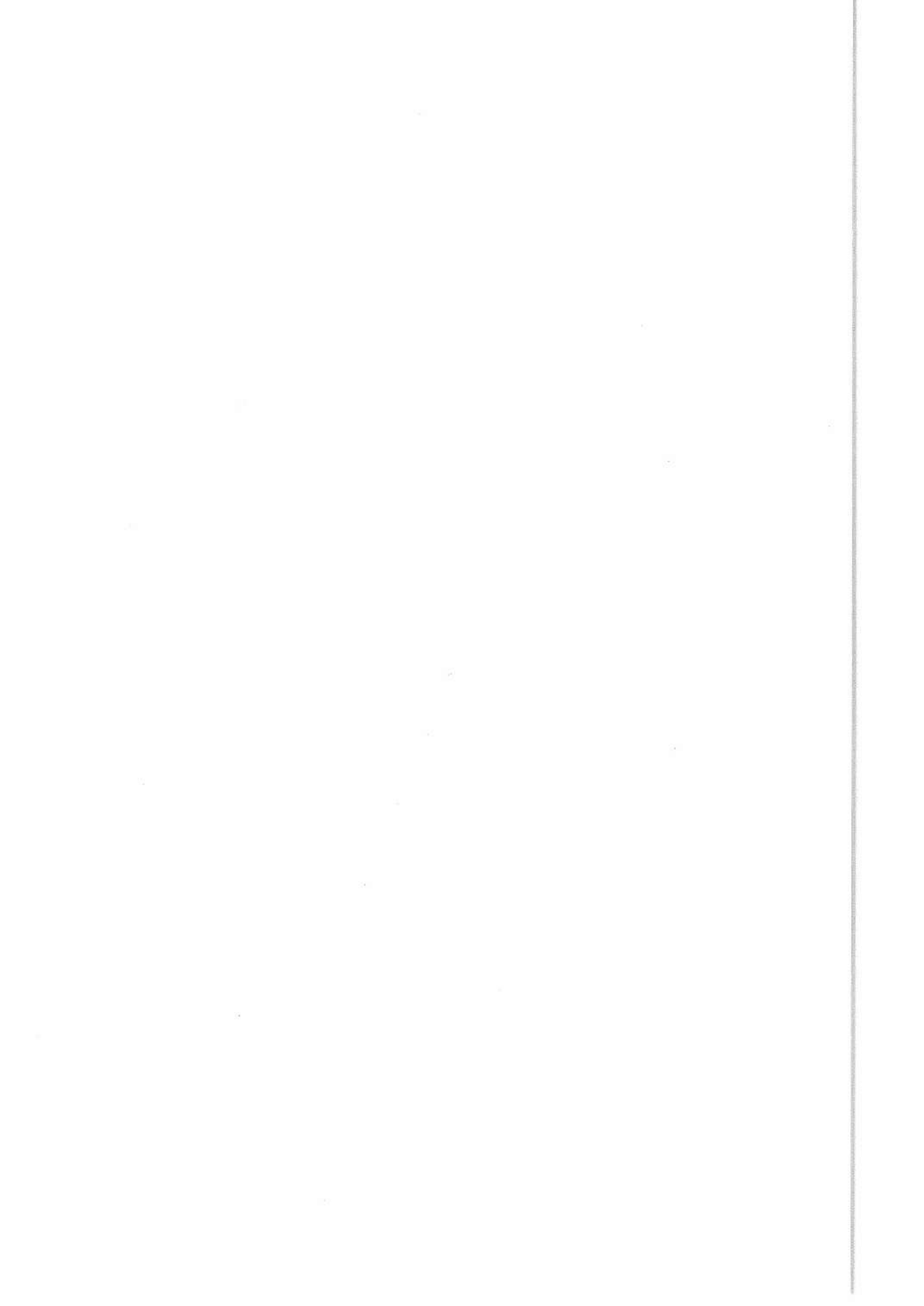


## 序

西に経ヶ岳の秀峰をいただき、東に天竜川の清流をひかえ、その美しい自然の中に恵まれた肥沃の土地が、南箕輪村であります。大昔より古代人々が生活した、かの有名な神柴遺跡をはじめとして、縄文早期・前期・中期・後期・晩期・弥生式・土師式・中世に至る優れた埋蔵文化財が数多く分布されています。これら重要な文化財を後世に伝えるということは、現代の私達の義務であります。今回西部地区開発（西駒扇状地）にともなって、大規模農道の開発に依り、高根遺跡の一部を通ることになり、当教育委員会は緊急にその保護を行うべく、関係者、機関と協議し県教育委員会の指導を仰ぎ、南信土地改良事務所よりの委託を受け、緊急発掘による記録保存の処置をとることになった次第であります。本工事が昭和47年度完成という事態でありましたので、県教育委員会の指導を得、村文化財保護委員を中心に調査団を編成し、11月30日より緊急発掘を開始した。西駒連峯には早くも白雪の訪れを眺めながら発掘は進められた。道路幅8mの限られた中での調査であったが、土壌・堅穴等の遺構が予想以上発見されたことにより、高根遺跡は古代集落址として、重要な遺跡であることが確認されたことは、今回の発掘の大きな成果であった。本遺跡調査に当っては、中央道北高根遺跡の発掘をされておられた、丸山指導主事・今村指導主事の方々には特別の御指導を賜りましたことを心より感謝すると共に、各調査員の皆様に厚くお礼を申し述べる次第であります。また、県教育委員会文化課、村当局（村長木ノ嶋新一）、南信土地改良事務所の方々、および同僚各位の御支援と保護委員の皆々様御協力を厚く御礼申し上げます。この小報告書が後世の方々の教育に聊でもお役にたてば幸と思います。

南箕輪村教育委員会

教育長 安 積 正 一



## 例 言

1. 本調査は、西部開発事業に伴う、大規模農道にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。
2. この調査は、西部開発事業に伴う緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、南箕輪村教育委員会が実施した。
3. 本調査は、47年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略とし、資料の再検討は後日の機会にゆずることとした。
4. 本報告書の執筆者は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明らかにした。

本文執筆者                      友野 良一 ・ 山田 とし

◦ 図版作製者

・ 遺構及び地形実測              友野 良一 ・ 丸山敏一郎

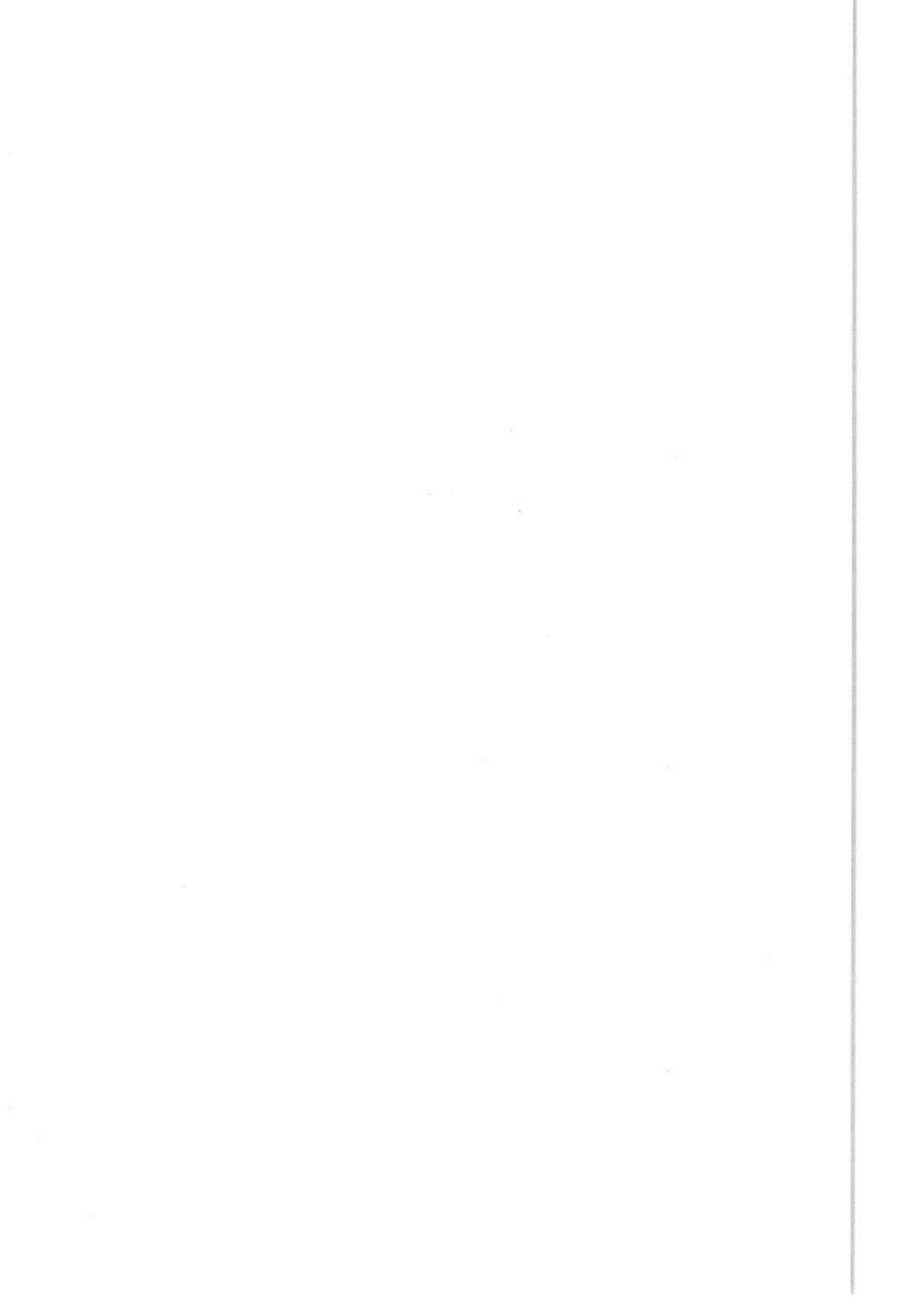
・ 土器拓影                          山田 とし

◦ 写真撮影

・ 発掘及び遺構                      山崎 文直 ・ 友野 良一

・ 遺物                                  友野 良一

5. 本報告書の編集は主として友野良一があたった。



# 目 次

序	
例 言	
目 次	.....(1)
挿 図 目 次	.....(2)
図 版 目 次	.....(2)
第 I 章 遺跡の環境	.....(3)
第 1 節 位 置	.....(3)
第 2 節 地形・地質	.....(3)
第 3 節 歴史的環境	.....(4)
第 II 章 調査の経過	.....(7)
第 1 節 保護措置の経過	.....(7)
第 2 節 発掘調査の経過	.....(8)
第 III 章 遺 構	.....(10)
第 1 節 土 墳 1~5 号土墳	.....(10)
第 2 節 堅 穴 1~3 号堅穴	.....(11)
第 IV 章 遺 物	.....(14)
第 1 節 縄文土器	.....(14)
第 2 節 陶 器	.....(16)
第 V 章 ま と め	.....(17)

## 挿 図 目 次

第 1 図	位 置 図	3
第 2 図	南箕輪村遺跡分布図	5
第 3 図	熊野三社の森	6
第 4 図	熊野三社の跡	6
第 5 図	発 掘 状 況	9
第 6 図	発 掘 状 況	9
第 7 図	発 掘 状 況	9
第 8 図	遺 跡 全 体 図	10
第 9 図	B 地区 I 土壌 1~5 号実測図	11
第 10 図	B 地区 II 1~3 号竪穴址実測図	12
第 11 図	土 器 拓 影	15

## 図 版 目 次

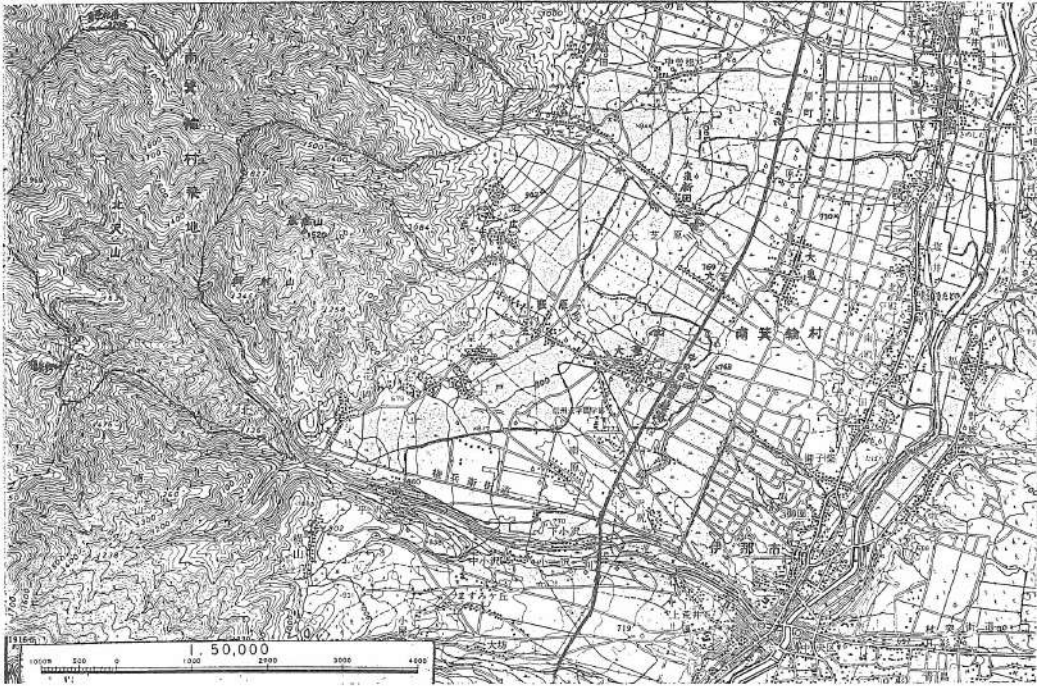
図 版 1	高根遺跡と大泉川・B 地区全景	18
図 版 2	高根遺跡 A 地区全景, A・B 地区発掘状況	19
図 版 3	高根遺跡 A 地区流石・B 地区遺構全景	20
図 版 4	高根遺跡 B 地区 I・土壌 1・5・2・3・4	21
図 版 5	高根遺跡 B 地区 II, 全景 1 号竪穴 1・2・3 全景	22
図 版 6	高根遺跡 B 地区 II, 2 号 3 号址・地質	23
図 版 7	高根遺跡出土土器	24
図 版 8	高根遺跡出土陶器	24



# 第1章 高根遺跡の環境

## 第1節 位置 (第1~2図, 図版1~2)

高根遺跡は、長野県上伊那郡南箕輪村大泉に所在する。木曾山脈の北部経ヶ岳の東標高1,700m大泉所山に源を発する大泉川の左岸段丘上、(標高788.15m)に位置する。遺跡地の面積は、東西150m, 南北100mに分布しているものと考えられる。現在は畑地及び山林, 原野である。一部A地区は水田化した時もあったようである。飯田線北殿駅より西へ3.5kmの位置にある。



第1図 位置図

## 第2節 地形・地質 (第1図, 図版1)

木曾山脈と、赤石山脈はともに南北に走り、木曾山脈と伊那山脈との間を、諏訪湖を水源とする天竜川が、これらの山地から流出する多くの支流を合せ南下している。

天竜川の右岸には複合扇状地、河岸段丘を形成する砂礫層が、火山灰土の層をのせ、伊那盆地が広がっている。

そのうち、伊那市~南箕輪村付近の東西の幅が広く13kmの谷底平野で、東方からは三峯川の扇状地が、西からは小沢川の扇状地、大泉川の扇状地が形成され、河岸段丘は4段に構成されている。

本遺跡は、大泉川の左岸段丘縁部に展開された長径150m方形の集落址と特殊遺構の遺跡である。標高783~790m、大泉川との比高はA地区6m、B地区13mを測る。河岸段丘としては浅い方である。遺跡付近は恵まれた湧水地帯であったが、新しい部落ができたり、大泉川の水を引水したりする工事が行なわれたため、現在は涸れてしまった。

A地区は、大泉川のゆるやかな傾斜地である。今回の発掘では遺物は発見でき得たが、遺構は検出できなかった。

遺跡地は、上部鮮新世の所産である塩嶺礫層が基盤となり、その上に大泉礫層を載せその上にロームが覆っている。大泉川には点々と縞状にローム層が見受けられる。この断面を知るには、(図版6)大泉部落の南春日街道の通過地点、大泉川の右岸に、工事に切り取られた断面が見える。この断面によると、上部に黒土層40cmその下に礫層3.5mがあり、その下部にローム層が堆積している。そのローム層の下部は礫層である。大泉川は古くは、現在の河川を流れずに、他を流れていたのではない。また、現在の河床の場所ではなく左岸の段丘端を流れていたかも知れない。B地区のローム層は多分に砂を含有しているところは、流出による堆積かも知れない。いずれにしても、この大泉川は複雑な様相を示している。A地区は南に傾斜しているが、B地区は東北の方向にゆるやかに傾斜をしている。

(友野良一)

### 第3節 歴史的環境 (第2~4図)

南箕輪地籍に分布する遺跡を概観すると、伊那盆地を南流する壮大な河成段丘を形成した天竜川にそっている遺跡は、15—内城遺跡、14—北垣外遺跡、13—柴宮遺跡、(縄文)。17—垣外遺跡、16—上人塚遺跡、(縄文・古墳)。18—天白遺跡、昭和42年、縄文前期・中期・弥生後期・土師。19—向垣外遺跡、(縄文・弥生・古墳)。20—山ノ神遺跡、(縄文・弥生)。21—丸山遺跡、(古墳)。26—天王遺跡。大清水川沿岸に分布している遺跡は、1—大清水遺跡、2—神子柴遺跡Ⅱ、3—神子柴遺跡Ⅲ、4—神子柴遺跡、昭和33年以来3回にわたって調査が行なわれ、かの有名な神子柴型石器を出土した遺跡である。大泉川に沿った遺跡は、12—田畑遺跡、(縄文)、10—宮ノ上遺跡、9—大泉遺跡、大泉部落の南、大泉部落は文禄の頃開通した春日街道の由緒ある部落である。(縄文・古墳時代)。6—北高根遺跡、中央道、(縄文早期・前期・中期・後期・晩期・弥生後期・土師・中世)、5—南高根遺跡、(縄文中期・灰釉・鉄器)、8—大芝東遺跡、(縄文中期・後期・晩期・灰釉・鉄器)、11—南原遺跡は平坦部の遺跡である。7—大芝西遺跡、(縄文)、戸谷川に面した遺跡、24—曾利目遺跡、中央道によって調査された、23—三本木遺跡、(縄文中期)、沢尻の北戸谷川の左岸、沢尻北遺跡等が主な遺跡である。

熊野三社、熊野三社権現を祭った社である。信濃国各地に熊野権現を招聘したのは、平安末期~鎌倉時代と言われている。高根遺跡もその頃発達した遺跡であるところより、熊野三社は、高根村の氏神であったのかも知れない。現在大泉部落の所有であるところより、旧大泉部落はこの神社を中心としてあったものと考えられはせんか。高根遺跡をとりまく南高根・北高根・大芝東遺跡は一連の遺跡であると考えたい。

(友野良一)



- |         |          |          |         |         |         |         |
|---------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|
| ① 大清水道跡 | ② 神子柴道跡Ⅱ | ③ 神子柴道跡Ⅲ | ④ 神子柴道跡 | ⑤ 南高根道跡 | ⑥ 北高根道跡 | ⑦ 大芝西道跡 |
| ⑧ 大芝東道跡 | ⑨ 大泉道跡   | ⑩ 宮ノ上道跡  | ⑪ 南原道跡  | ⑫ 田畑道跡  | ⑬ 柴宮道跡  | ⑭ 北垣外道跡 |
| ⑮ 内城道跡  | ⑯ 上人塚道跡  | ⑰ 垣外道跡   | ⑱ 天白道跡  | ⑲ 向垣外道跡 | ⑳ 山の神道跡 | ㉑ 丸山道跡  |
| ㉒ 南原道跡  | ㉓ 三本木原道跡 | ㉔ 曾利目道跡  | ㉕ 沢尻北道跡 | ㉖ 天王道跡  |         |         |

第2図 南箕輪村遺跡分布図



第3図 熊野三社の森



第4図 熊野三社の跡

## 第Ⅱ章 調査の経過

### 第1節 保護措置の経過

高根遺跡は、昭和43年12月に実施された長野県教育委員会主催による中央自動車道建設に伴う埋蔵文化財分布調査の際、再確認された重要な遺跡である。今回西部開発の一貫として、大規模農道の通過地点となったので、長野県南信土地改良事務所は、行政担当区域である南箕輪村教育委員会に、調査を委託した。南箕輪村教育委員会は、急拠、県教育委員会と協議して、関係者の参集をもとめて保護措置を計った結果、事前に学術調査を行って記録保存を実施することになった。

#### (保護側)

県教育委員会文化課長	飯島 丁己
〃 係長	金井 汲次
〃 指導主事	桐原 健
伊那教育事務所長	徳永 正人
〃 総務課長	松島 勇
南箕輪村教育委員会教育長	安積 正一
〃 次長	清水 常雄
〃 主事	山崎 文直

#### (開発側)

長野県南信土地改良事務所長	岡田 謙一
〃 担当技師	小林 寛人

#### 高根遺跡学術調査団

団長	友野 良一	日本考古学協会会員
調査員	清水 博之助	上伊那考古学会会員
〃	御子柴 泰正	長野県考古学会会員
〃	長瀬 康明	〃
〃	太田 保	〃
〃	山田 とし	〃
調査事務局	清水 常雄	
〃	山崎 文直	

10月4日 前節に述べたように、工事予定が早期着工になったため、緊急に発掘の必要にせまられ、南信土地改良事務所より、小林係長が役場農林課を訪ずれ、大規模農道下・大芝西遺跡・北高根遺跡の発掘調査の依頼があり、農林課長・教育委員会へその旨連絡がある。

10月16日 有賀教育委員長が現地を確認する。

10月22日 南信土地改良事務所小林係長が遺跡の発掘調査の依頼に教育委員会を訪ずれ、安積教育長、この件につき協議、県教委、中央道南箕輪地区発掘担当丸山指導主事に相談する。

10月23日 委員長・教育長、辰野町に出向き、五反田遺跡調査をされている県教委、桐原指導主事に指導をうける。調査団長に友野良一氏をお願いすることに決定する。

10月24日 教育長、伊那建設事務所に友野良一氏を訪問、団長を依頼する。

10月25日 大芝西遺跡・高根遺跡発掘について受託する様、県教育委員会より調査の依頼あり。

10月27日 伊那建設事務所所長・用地課長に、友野良一氏の件につき、安積教育長・福沢農林課長・南信土地改良事務所庶務課長が同道陳情する。

10月28日 南信土地改良事務所より、発掘調査及び契約書の提出について話合あり。

10月30日 友野良一氏現地調査、契約について打合せ、有賀教育委員長契約については分布調査の上、契約を結ぶことに決定。清水文化財委員長・沢田副委員長立ち合い。

11月5日 有賀教育委員長・清水文化財委員長・中央道丸山主事にて現地の状況を調査。

11月14日 分布調査、友野良一・有賀教委育長・清水文化財委員長、作業員10名調査、その結果大芝西遺跡は発掘できず高根遺跡を調査することに決定。

11月16日 県教育委員会文化課へ、緊急発掘調査届を出す。47年11月20日～12月31日まで。

11月17日 高根遺跡発掘について、南信土地改良事務所と契約することを検討する。

11月18日 契約について有賀教育委員長・清水文化財委員長・丸山指導主事・今村指導主事・友野良一で協議し、予算696,000円で南信土地改良事務所と契約することを決定。

11月2日 南信土地改良事務所と南箕輪村長と、高根遺跡発掘について696,000円にて契約を結ぶ。但し大芝西遺跡については道路工事中遺物の発見の場合は、別に調査の契約を考える。

11月22日 友野団長、調査団と発掘細部にわたって打ち合せ。

11月24日 南箕輪村文化財専門委員会、高根遺跡発掘について経過の説明及び予算の確認、調査時期の確認をする。

## 第2節 発掘調査の経過（第5・6・7図、図版1・2）

11月29日 8時30分作業開始、終了5時道跡センターを中心として両側に2m×2mの東西A・B・C・D・E・F・G。A地区に30グリットを設定。そのうちCの1・3・5・7・9・11・13・15・17・19・21・23。Aの4・15・17。Dの17・19。Eの15の調査を行う。Cの3の地下30cm砂礫層中より、灰釉陶器片検出。Cの7グリット地下30cmに加曾利E式土器片出土。Cの5グリット地下40cmより、縄文中期末葉と思われる土器片を検出。

土質は丸礫と角礫を混じた砂礫層である。土器片は流出によるものと考えられる。明治5年頃開田したという。

11月30日 8時30分作業開始、終了5時。本日は昨日の作業に引きついで作業を進める。Aの14・15・17・20・21・22。Bの14, Cの20・22・24・25・26・27, Dの18を拡張調査、前述の様に流石の間より土器片が出土。A, B, C, Dの15・16・17グリットには、最初配石遺構と考えられる様な列石が発見される。この石列の間より縄文中期末葉及び灰釉陶器片が検出されたので、これをA区流石群として調査する。この位置は、大泉川の傾斜変遷位置に当る箇所、南北幅6m、東西にはもっと伸びる可能性があると思われる。

12月2日 作業開始8時30分、終了5時。B地区にグリットを設定する。B地区は36より～吹上線道路まで。Aの42・43・44, Bの42・43・44, Cの42・43・44・45・46・48・50の調査を開始する。遺物は、Cの43・44・47・49より土器片が出土。同じ45グリットからは、焼土が検出された。

12月3日 作業開始8時30分、終了5時。前日に続いて、IのA・B・C 42・43・44・45グリットの調査。その結果、土壌1～5号までを発見。

11月4日 作業開始8時30分、終了5時。本日よりII地区Aの52・54・55・56・58・60・62グリットの発掘。

12月5日 作業開始8時30分、終了5時。A・B, C・Dの54～58グリットを調査。B・C, Dの54～55は1号址を。A・B 56～57に2号址, C・Dの56～57に3号址を発見。

12月6日 測量を行い作業終了。

(清水常雄, 山崎文直)



第5図 発掘状況



第6図 発掘状況



第7図 発掘状況

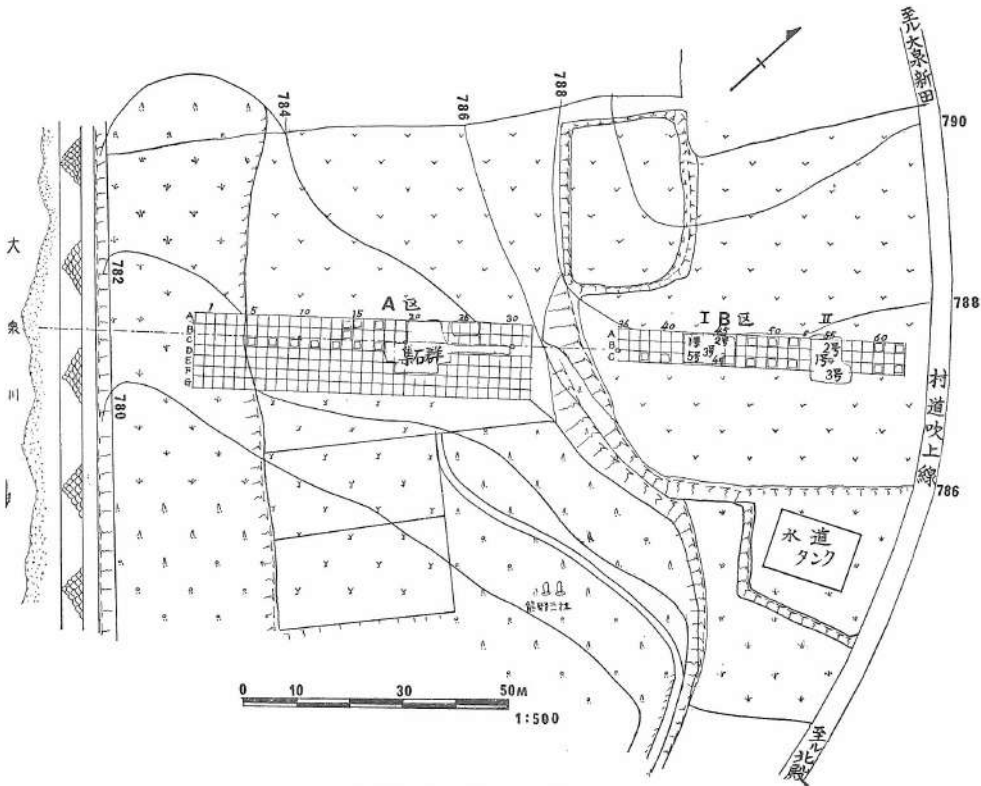
## 第Ⅲ章 遺 構

### 第1節 土 壙 群 (第8~10図, 図版3~4)

1号土壙。大泉川左岸段丘上にあり、南北1.8m、東西1m 三日月形をなし、西壁は40度の傾斜、底部は50cm幅、東壁は垂直、東側に砂礫のマウンドとがある。深さは約50cm。土壙内には黒褐色土が充満していた。その形は、二つが合わさった如き土壙である。遺物は、縄文中期末葉のもの。

2号土壙。1号土壙の北A・B 44~45 グリッドに発見されたもので、第1号土壙と同様三日月形を呈し、東西1.2m、南北3m、西壁は東に50度傾斜、東壁はほぼ直壁、東側は砂礫のマウンドをなしている。土壙内は黒褐色土が充満していた。土壙の底は、砂礫層である。遺物は、縄文中期末葉、周辺からも同じ時期の土器が出土した。

3号土壙。2号土壙の東1mの所に発見されたもの、東西1.6m、南北1.5m、表土より40cm茶褐色土を掘り込んで作られたもので、内部には15~30cm内外の自然石が15箇投げ入れたような形



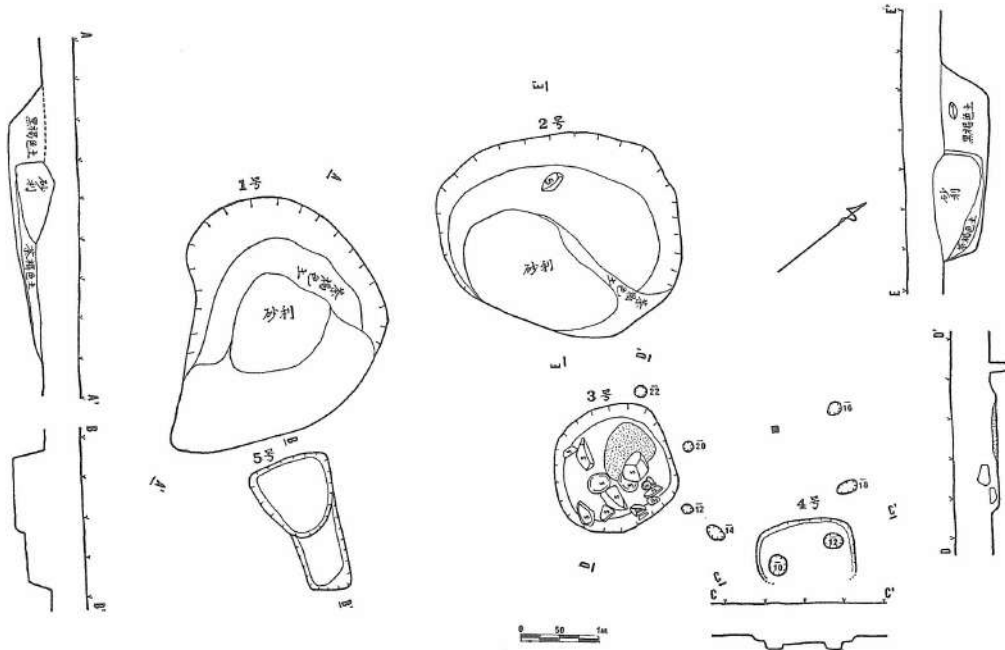
第8図 遺跡全体図



で検出された。また、中央西寄りに焼土が70×65cm、厚さ6cmに堆積されていた。浅い小形の土壙である。遺物は、土器片が一片検出されたが時期は不明。

**4号土壙。**本土壙は、3号土壙の東北1.3mの箇所に発見されたものである。東側が用地外のため発掘を断念した。大きさは東西約1m、南北1.25m、深さ地表より40cm、茶褐色土層に14cm内外掘り込んで作られたもの。土壙内に径23~25cm内外の深さ10~12cmの穴が2箇検出された。周囲にも円形の穴が2箇発見されたが、関係の有無は不明である。遺物は発見されなかった。

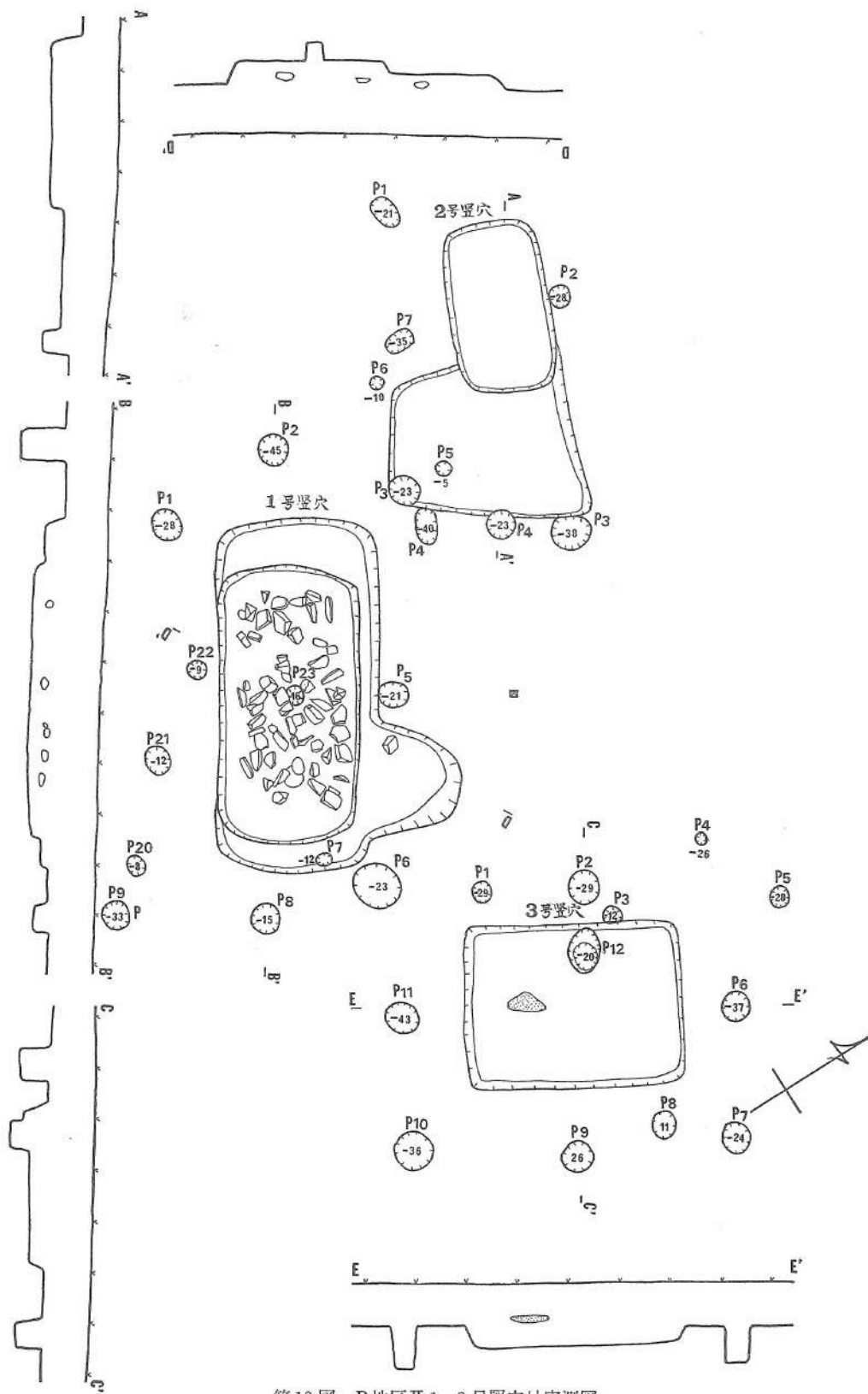
**5号土壙。**1号土壙の東側に接して発見された。地表下45cm茶褐色土に掘り込んで作られ、東側は東西65cm、南北60cm、深さ茶褐色土層に25cm掘り込んで作られた長方形、それに続いて西側に、東西1m南北平均90cm深さ地上から89cm、床面は平、東に10度の傾斜をなす壁の二つが一つとなった形の土壙である。遺物は出土しなかった。



第9図 B地区I土壙1~5号実測図

**第2節 堅 穴 址 (第10図, 図版5~6)**

**1号堅穴。**グリットB・C・D 54~55に発見されたものである。東西3.5m・南北1.6m、北側東寄りに75cmの張り出しを有し、深さは、地表より45~50cm茶褐色層に掘り込み、内側は二重に10cmの比高をもって更に掘り凹められ、その内側の凹みに、10~20cm大の自然石を75個凹の高さに敷詰められた堅穴址である。この敷詰められた石を除去すると、床面は平な堅穴となり、中央にP<sub>23</sub>径15×18深さ16cmの穴を発見する。また、周囲に柱穴と考えられる図P<sub>1</sub>~P<sub>23</sub>は本址に関係があ



第10图 B地区II 1~3号竖穴址实测图

と思われる柱穴址である。うち、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_6 \cdot P_9$  と  $P_2 \cdot P_8$  は、その中間にあり棟を渡す外柱と考えられる柱穴址である。また、 $P_5$  と  $P_{21}$  は  $P_3 \cdot P_6$  との桁の中間にある柱穴と考えられる。そのほか、 $P_1$  と  $P_9$  の中間  $P_{22}$  も同様な存在である。切妻中央外柱の掘建式の建物の如くに考えられる。遺物は、灰釉陶器、11世紀後半。

**2号堅穴。**本址は、1号堅穴址の西北に発見されたもので、二つの堅穴が複合しあった堅穴址である。東側は東西1.45m、南北1.8m、不正方形をなし、深さは、地表面より45cm、床面は平な堅穴である。内部には  $P_5$  と、1号堅穴址の  $P_3$  および、 $P_3 \cdot P_4$ 、1号堅穴址  $P_4$  は壁に接している。西側堅穴は東堅穴よりおくれて作られたもので、東西1.65m、南北1.02m、深さ地表より65cm、東の堅穴とは11cm深く掘り凹められている、床面は平の、小判形堅穴址である。外周の柱穴址は、 $P_1 \cdot P_7$ 、1号址の  $P_4$  とは直列間隔130~140m、 $P_3 \cdot P_4$ 、1号址の  $P_4$  とは70の等間隔直列柱、 $P_2$  は北側で隔れているが、推定上屋に関係をもつ柱穴と考えられるもの。遺物は、東西堅穴の中間より、聖宋元宝と内耳土器が発見された。時期はこの頃のものと考えられる。

**3号堅穴。**本堅穴は、1号堅穴の東北1.3mに接して発見されたものである。大きさは、東西1.6m、南北2.15m、深さ地表面より62cm茶褐色土層に掘り凹められて作られた堅穴址である。床面は、北側がやや高く南に僅かに傾斜をなして堅く踏みかためられている。中央やや南より地表下35cmにレンズ状の焼土が検出されたが、床面には達していなく浮いたものであった。また、中央やや北寄の壁に接して径40×30深さ20cm楕円形の穴が床面に発見。外周に  $P_1 \sim P_{12}$  の柱穴を検出。1号堅穴  $P_6$  と  $P_2 \cdot P_5$  は等間隔2m直列、東側  $P_{10} \cdot P_9 \cdot P_7$  は1.6m等間隔直列穴、 $P_6 \cdot P_{11}$  は1号址と同様中間穴である。これ等の柱穴を結ぶと4m×2.5mの切妻建築を考えさせる柱穴である。遺物は発見されなかった。

(友野良一)

## 第Ⅳ章 遺 物

### 第1節 縄 文 土 器

#### 土 器 (第11図, 図版7)

1. は僅かに内反し, 厚さは4mm程の薄手式土器である。文様は無文地に低い粘土紐を上下二本横位に貼り付け, その中に蛇行状のそれを加飾してある。さらに粘土紐の上に刻目状の爪形文を部分的に配している。色調は茶褐色を呈し, 胎土に雲母, 長石を含み, 焼成は良好である。

1. は東海地方の天神山式に類似するのであろう。

2. はへら状工具による沈線を縦状に配し, それに区画された中に, 無数の沈線を横位に施してある。色調は赤褐色を呈し, 胎土に長石を含み, 焼成は中位である。2. は藤内式に類似するものであろう。

(3~8) は, へら状工具による爪形文を, いろいろに組み合わせて, 全体的には抽象文を構成しているものであり, 藤内式に含まれる。

(3, 6) は, 無文地に爪形文を施してある。色調は黄褐色(3), 赤褐色(6)を呈し, 胎土に雲母(3, 6)を含み, 焼成は良好(3), 不良(6)である。

(4~5) は隆帯の縁に, 爪形文を施してあり, 特に5. では, 破片上部に単節の斜縄文を付加して, 文様効果をさらに増している。色調は黄褐色(4~5)を呈し, 胎土に雲母, 長石(4~5)を含み, 焼成は良好(4~5)である。

7. は, 口縁上部の内側がふくれる口縁部破片であり, 文様は(3, 6)と同様である。色調は赤褐色を呈し, 胎土に雲母を含み, 焼成は良好である。

8. は破片下部に隆帯を, 楕円形状に貼り付け, その縁に沿って, 同様に爪形文を有している。色調は茶褐色を呈し, 胎土に雲母を含み, 焼成は良好である。

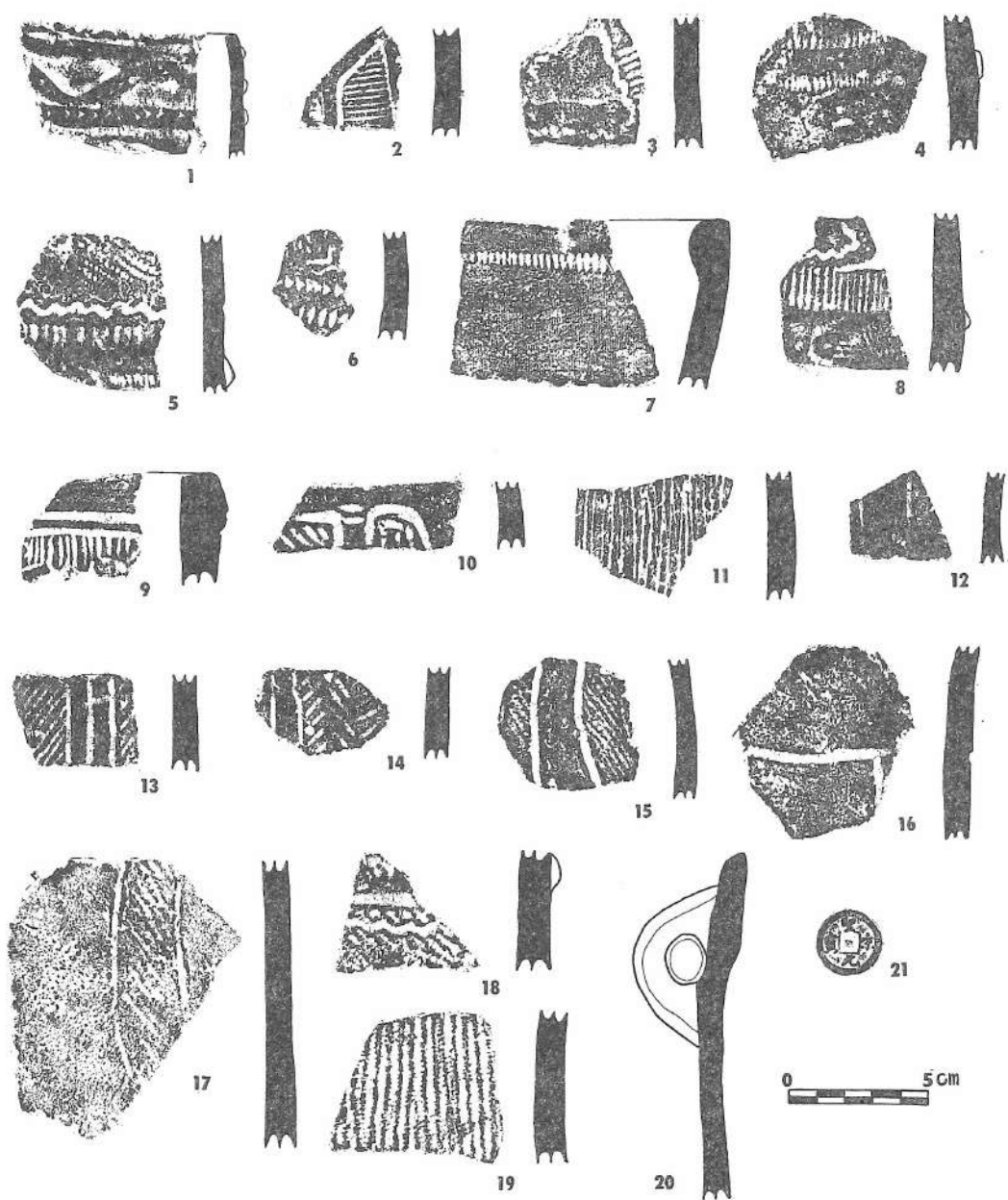
9. は外面がわずかに肥厚する口縁部破片である。文様帯は上部に横位の沈線を二本配し, 下部には櫛状工具による沈線文を縦位に引いてある。(拓影には不明瞭である) 色調は赤褐色を呈し, 胎土に長石を含み, 焼成は良好である。

10. は沈線を長円形状に配し, その中に沈線文や刺突文を施してある。色調は黄褐色を呈し, 胎土に長石を含み, 焼成は良好である。

11. は条線を無数に, また不規則に施してある。色調は黄褐色を呈し, 胎土に雲母を含み, 焼成は中位である。

12. は斜縄文地にやや太目の, 浅い懸垂文を配してある。色調は黒褐色を呈し, 胎土に雲母を含み, 焼成は中位である。

13. は細目で, 深い懸垂文と, 斜目沈線文の組み合わったもの。色調は茶褐色を呈し, 胎土に雲母を含み, 焼成は中位である。



第 11 図

14. は沈線をへの字状に配してある。色調は茶褐色を呈し、胎土に雲母を含み、焼成は中位である。  
 (15, 17) は斜縄文地に、若干カーブを有する懸垂文を施し、磨消縄文の手法が見られる。色調は黒褐色 (15), 黄褐色 (17) を呈し、胎土に雲母 (15), 長石 (17) を含み、焼成は良好 (15), 不良 (17) である。

16. は無文地に沈線を直角状に施してある。色調は黄褐色を呈し、雲母を含み、焼成は中位である。  
 (9~17) は加曾利E式に属していると思われる。

18. は1号土壙，より出土した土器であり，文様は破片上部に隆帯を，下部には斜縄文地に波状沈線を施し，全体的には意匠文的な構成をなしている。色調は黄褐色を呈し，胎土に長石を含み，焼成は不良である。

19. は2号土壙。より出土した土器であり，文様は全体に粗い縄文が施されている。色調は茶褐色を呈し，胎土に雲母を含み，焼成は不良である。

20. は2号堅穴より出土した土器である。中世（鎌倉時代）より盛えた内耳土器の一派であろう。両面に多量の炭化物が付着している。色調は黒褐色を呈し，焼成は緊緻で，すこぶる良好である。

古 銭（第11図）

2号堅穴より出土した聖宋元宝である。鑄造年代は1101年であって，清盛の日宋貿易の際に輸入されたのであろう。 (山 田 と し)

B 地 区 出 土

番号	生産地	器 形	時 期	そ の 他	番号	生産地	器 形	時 期	そ の 他
2	美 濃	灰釉 皿	11世紀後半		13	美 濃	灰 釉	11世紀後半	
3	"	" 碗	"		17	"	"	11世紀後半	
6	"	"	"		18	不 明	不 明	不 明	
7	"	"	"		19	"	"	11世紀後半	
8	"	"	"		21	"	"	"	堅穴2号
10	"	"	"		22	"	"	"	堅穴1号
11	"	" 碗	"		23	"	"	"	
15	"	" "	"		24	"	"	"	
16	"	" "	"		25	"	"	"	
20	"	" "	"		26	"	"	"	
1	"	" 杯	"		27	"	"	"	
4	"	" "	"		28	"	"	"	
9	"	"	"		29	"	"	"	
12	不 明	不 明	不 明						

番号	生産地	器 形	時 期	そ の 他
5	常 滑	大 甕	鎌 倉	土壙1号

番号	生産地	器 形	時 期	そ の 他
14	古 瀬 戸	天目茶碗	南 北 期	A-54

## 第V章 ま と め

中央高速自動車道の開通とともに、西部開発の計画も促進され、それに伴って、大規模農道の工事が急速に行われることになり、南箕輪村教育委員会は、道路内にある高根遺跡の緊急発掘を実施した。本事業は昭和47年度事業である関係上、年度末までに報告する義務があるので、十分時間をかけ整理することが許されないで、ここでは発掘の過程において把握し得た所見と問題点について、今後の研究と保存措置の参考に資したい。

遺構、A地区は、大泉川の南に面した緩かな傾斜地で、遺跡地として考えられる場所である。予定される道路のセンターの方向を基準として分布図に示す如きグリットを設定して調査を行ったが、これという遺構は発見されなかったが、傾斜変遷地点に一部限定された区割に、人工かと思われる程の流石群が発見された。また、この流石の間から縄文中期の土器片が若干検出された程度である。

B区は、大泉川の左岸段丘にあり、B区の南をIとした。I区からは、土壙5箇所が発見された。1号土壙より常滑、大甕、鎌倉期の破片が検出された。2号壙からは縄文中期の土器が発見された。他の土壙からは遺物は発見されなかった。II区からは、堅穴3箇所が発見される。1号堅穴は実測図のとおり長方形柱穴を伴う堅穴である。遺物は11世紀後半の美濃産の灰釉陶器片が出土した。3号堅穴も1号堅穴とはほぼ同様な堅穴であるが、遺物は出土しなかった。2号堅穴からは内耳、聖宋元宝が検出され、時期は鎌倉と考えられる。近年中央道の発掘で飯田地区からこれらと類似の堅穴が発見されたのを始め、153号線バイパス工事大島遺跡、飯島本郷南羽場遺跡からも発見されているが、まだ報告されていないので、今回は紹介に止めておきたい。また本遺跡の東中央道敷地内北高根A遺跡からも中世の住居址2と柱穴群が発見されている、これらも関連するものと考えられる。

遺物、縄文式土器1は東海地方天神山式類似土器、中央道北高根遺跡に発見されている。その外は藤内式、加曾利E式、内耳。

陶器、本遺跡出土の遺物として特に注意したいのは陶器である。この陶器を分類してみると。一番多いのは11世紀後半美濃産灰釉陶器で、出土量29箇中25箇で86%を占めている。本遺跡の栄えたのは、この頃ではなかろうか。その他、常滑産の大甕、鎌倉時代3.44%。古瀬戸産、天目茶碗、南北朝時代等が出土した。新しい遺構と相俟って今後の研究の好資料と言えよう。

今回の調査に当たり御指導を賜った、県教育委員会、金井係長、桐原指導主事、中央道伊那地区担当の今村指導主事、丸山指導主事、伊那市役所小池政美、南信土地改良事務所小林寛人技師、伊那教育事務所総務課長松島勇、村当局村長木ノ島新一、発掘に参加された皆様、特に名古屋大学助教授榎崎先生には陶器の鑑定をお願いしたところ心よくお引受けいただきました。陶器は榎崎先生の御教授によったものである。以上の方々の御協力によりまして、ここに小報告のできますことを紙上を以って厚く御礼を申し上げる次第であります。

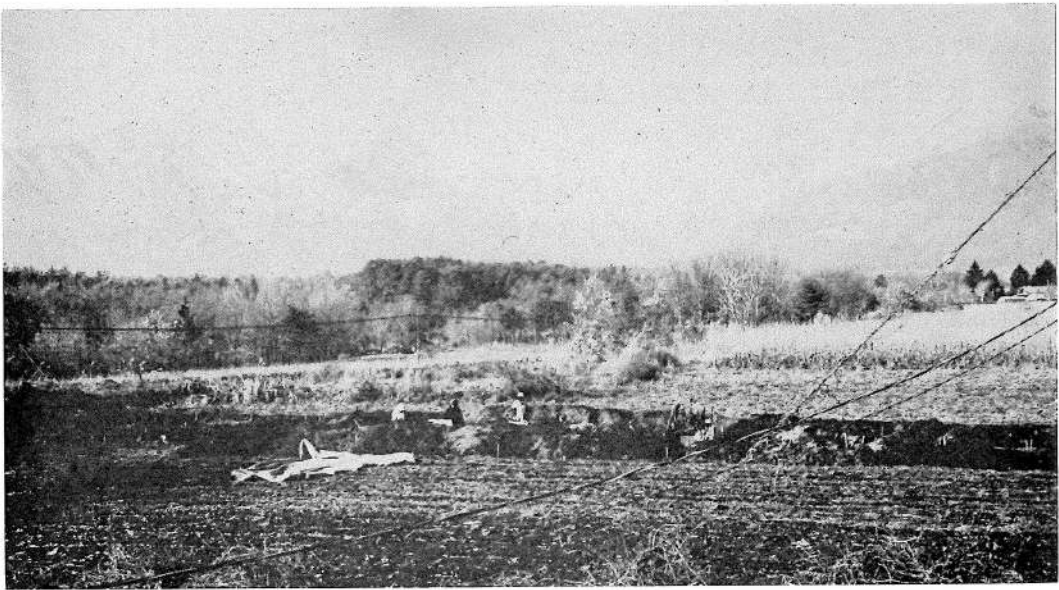
(友野良一)

注 榎崎彰一「瓷器の道(1)」; 大場磐雄・榎崎彰一「神坂峠」; 信濃史料刊行会「信濃史料第一巻」

図版 1



高根遺跡と大泉川



高根遺跡 B 地区





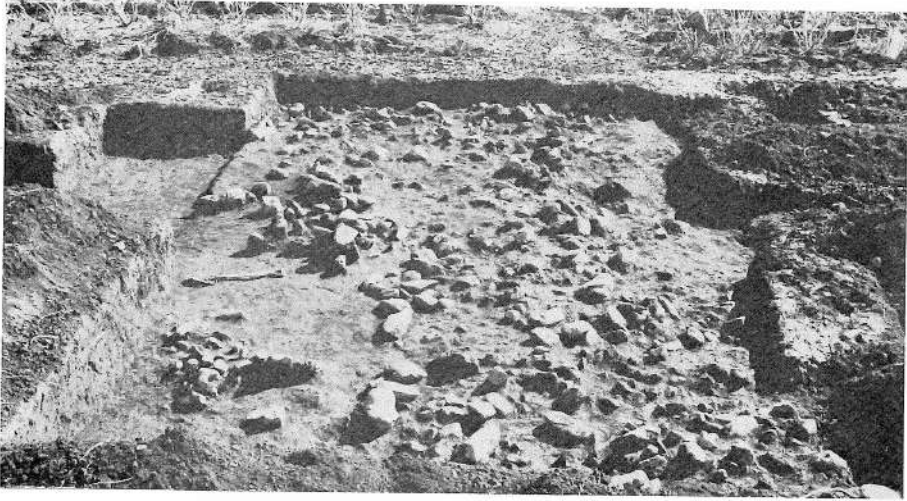
高根遺跡 A 地区全景



高根遺跡 B 地区発掘状況



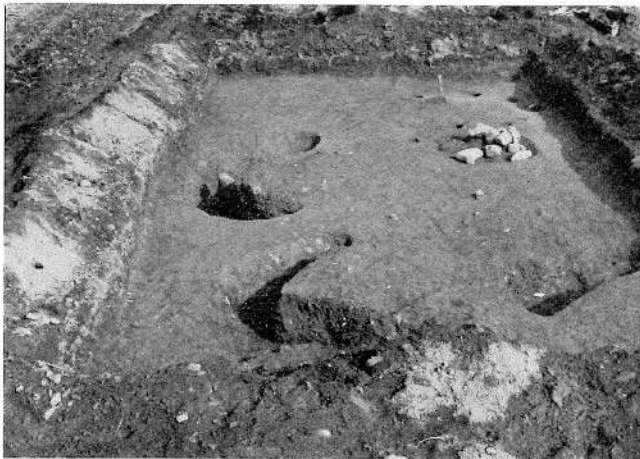
A 地区発掘状況



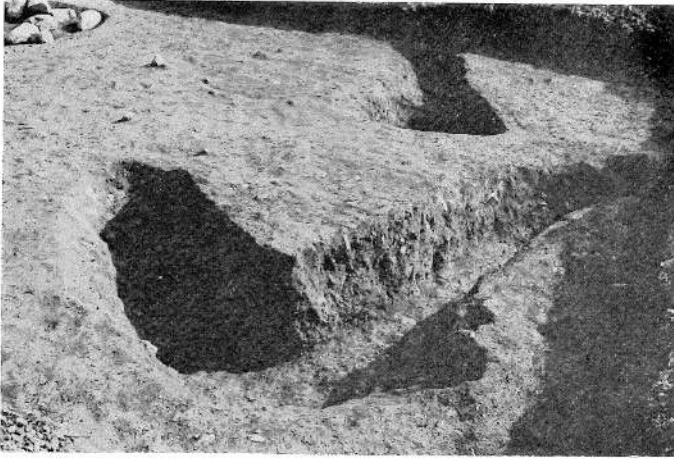
高根遺跡 A 地区流石



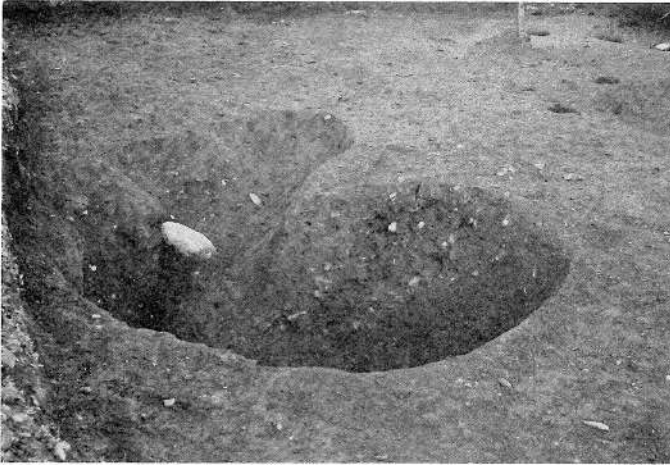
高根遺跡 A 地区流石



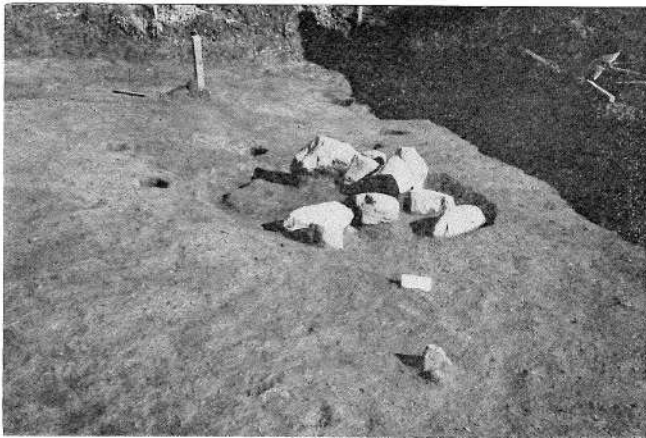
B 地区遺構



高根遺跡B地区 I(上) 土壙5(下) 土壙1



高根遺跡B地区 I 土壙2



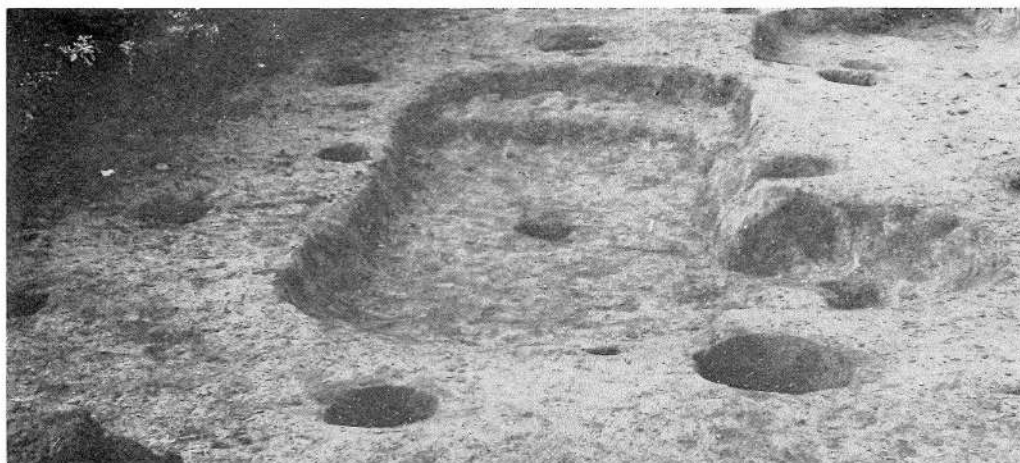
高根遺跡B地区 I 土壙3, 4



高根遺跡B地区Ⅱ全景 右1号, 上2号, 下3号



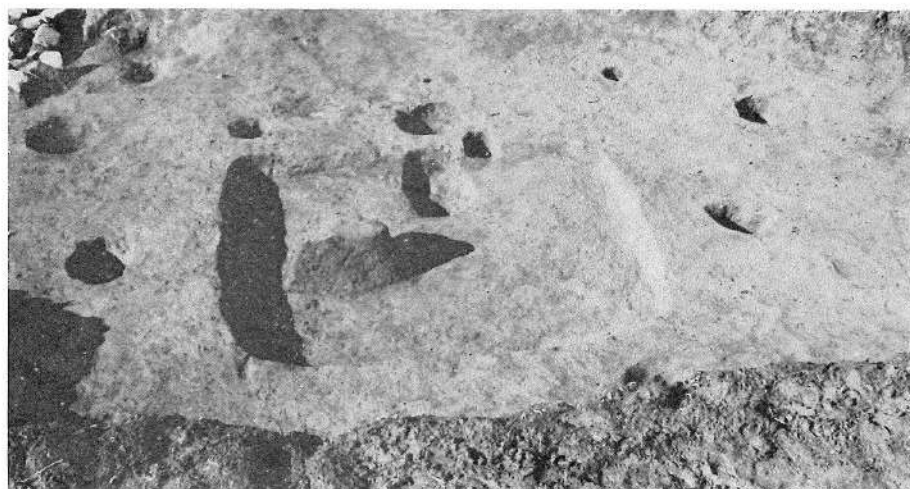
高根遺跡B地区Ⅱ1号址 石の入っている状況



高根遺跡B地区Ⅱ1号址



高根遺跡B地区Ⅱ2号址

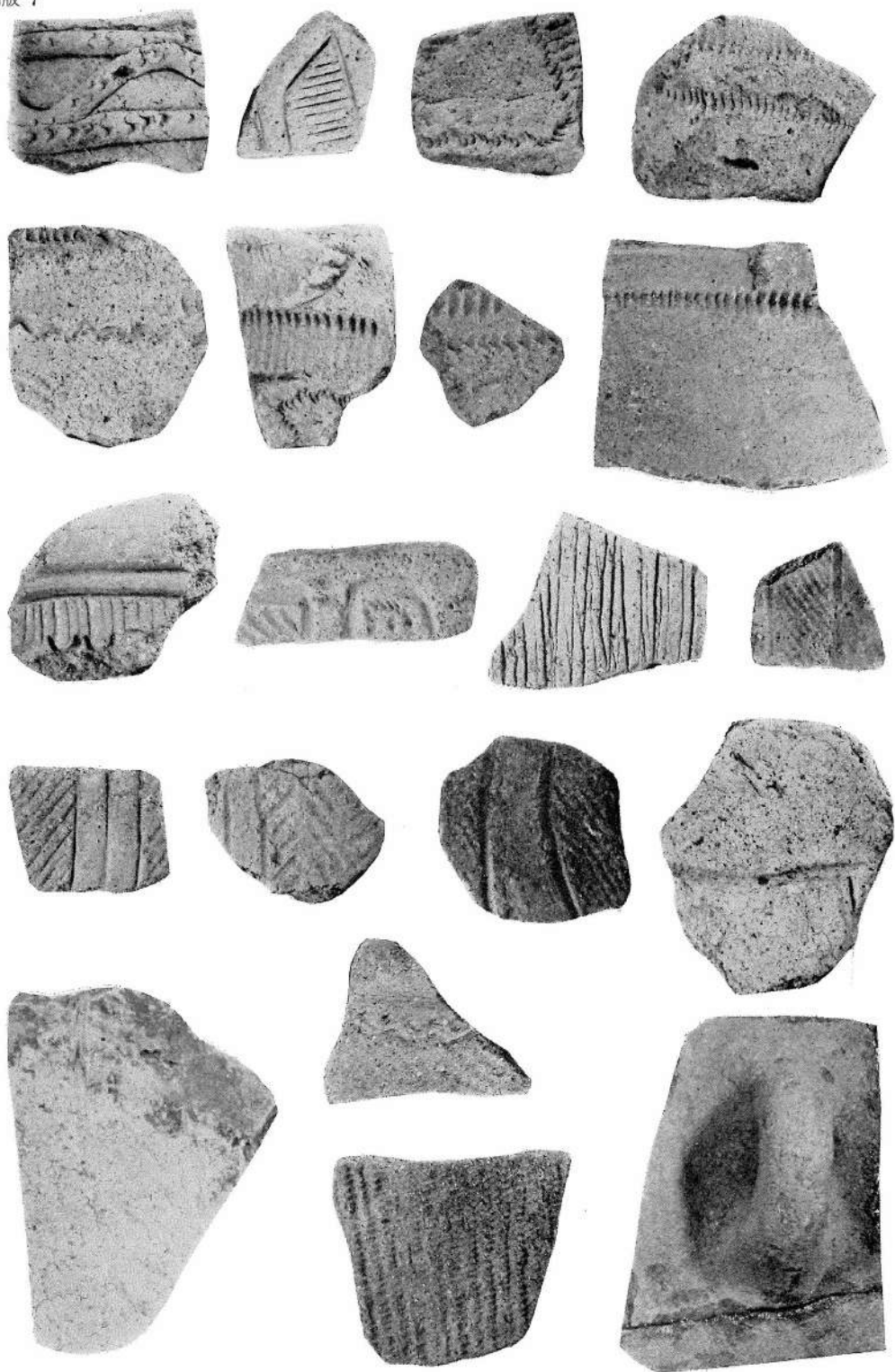


高根遺跡B地区Ⅱ3号址

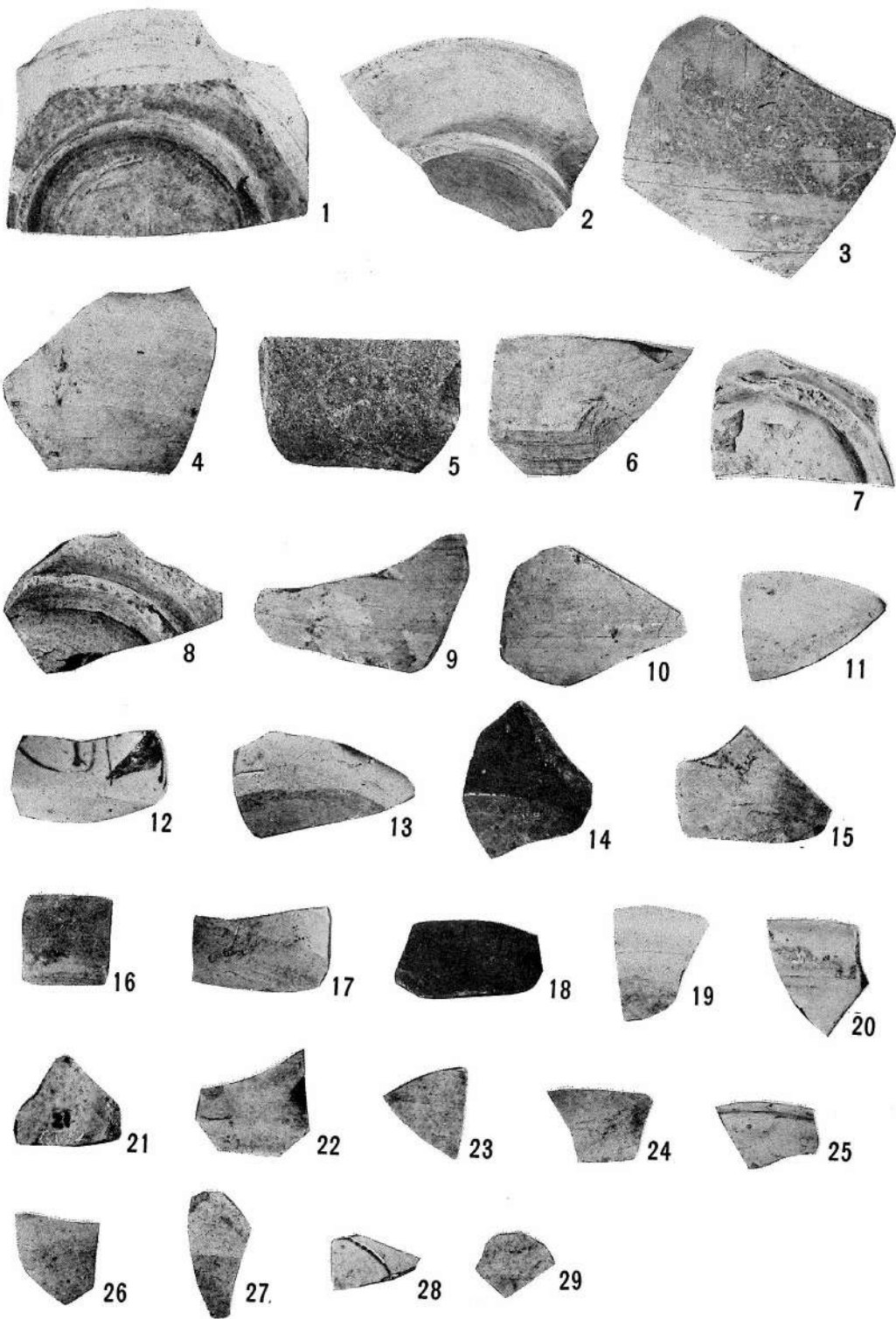


大泉部落南地点の地質

図版 7



高根遺跡出土土器



高根遺跡出土陶器





高根遺跡緊急発掘調査報告書

昭和48年3月20日 印刷

昭和48年3月30日 発行

発行所 長野県上伊那郡南箕輪村  
南箕輪村教育委員会

印刷所 長野県岡谷市川岸108  
中央印刷株式会社

(非売品)

